中日ニュース
シネスコ版

京劇ニュースNo.240
労働婦ニュースNo.168
中日No.181
水の祭典開く
夏季口体 山口 210呎

No. 505

38. 9. 20

一、スポーツ

海老原世界の王座へ　世界フライ級選手権

ポーンか、海老原か、注目の世界フライ級タイトル・マッチ十五回戦が、十八日夜、東京千駄ケ谷の東京都体育館で行われました。

ゴングと同時に海老原烈しくチャンピオンを攻めたて、一回、一分三十六秒、海老原の左ストレートが命中、チャンピオン早くもダウンをきっします、ポーン立ちあがるや海老原の左右の連打をあび再びダウン。こうして海老原はわずか二分七秒でフライ級世界の王座を獲得したのです。

現代に生きる

一、無実を叫んで十四年

――松川裁判――

昭和二十四年八月十七日未明、東北本線松川―金谷川間で列車が脱線転覆、乗務員三名が死亡したいわゆる松川事件。

当時占領支配下にあったわが国では、相次ぐ国鉄を舞台に奇怪な事件が続出しました。この松川事件もその一つなのです。折から世相は左翼勢力抑圧に、当局は、東芝、国鉄労組から二十人を容疑者として逮捕。やがて長い歳月の裁判が始ったのです。

すなわち、福島の一審では、全員死刑を含む有罪に、次いで仙台の第二審。こうした判決の不合理を指摘する作家の広津和郎氏を始め世論にまでたい頭していった松川事件は、単なる刑事裁判から、史上稀にみる社会問題へと大きく発展していったのです。余期しない判決に、留守家族は冷たい世間の目と、一段と深まる窮乏生活の中で、夫の、或いは伜の無実を信じ、最後ののぞみを最高裁に托するのでした。

それから二年。疑を解明すべく、再び仙台にやり直しを命じ、門田裁判長は「珠玉の真実」を発見、検察側をしりぞけ、被告全員を無罪としたのです。

しかしその喜びも束の間、検察側の上告によって、再びいつ晴れるとも知れない暗たんたる人生を歩むことになったのです。

歳月は再び二年。この日を迎えた九月十二日。午前十時。斎藤裁判長は証拠不充分として被告全員を無罪、終止符がうたれたのです。

死刑から無罪へ――

人生は短かく裁判は長し。失われた名誉と人権の回復に彼らは「これが残された人生です」と言葉少なく語るのでした。

643呎　432呎　111呎

製作配給　東京中日新聞　中部日本ニュース映画社